

Battles in W.W.II

第6回 モンテ・カッシノの戦い 杉浦 康

(右ページ左上) 米第5軍を指揮したマーク・W・クラーク中将。右側は英第10軍団、第7機甲師団長エクザキン少将。モンテ・カッシノ戦直前の1943年秋の撮影。

(右ページ右上) ドイツ降下部隊の育ての親といわれた、クルト・シュトゥデント空軍中将(後、大将)。全てのドイツ降下部隊をまとめた第1降下軍の指揮官だった。

(右ページ左下) クレタ作戦での大損害以来、降下作戦を取りやめた降下猟兵だが、その後の地上戦では、激戦の焦点にあって、精兵としての勇猛ぶりと粘り強さを示した。

(右ページ右下) モンテ・カッシノ戦の象徴となった、カッシノ山頂のベネディクト修道院。4次にわたる攻防戦と猛爆撃のため廃墟と化した。

☆グスタフ・ラインの攻防

1943年夏、連合軍のシシリー島上陸作戦によって、イタリアの独裁者ムソリーニ政権の基盤が緩み、ヴィクトル・エマヌエル国王はムソリーニを罷免・追放して新たにバドリオ政権を樹立した。そして、同年9月8日イタリアは連合軍に降伏した。

この間、アメリカ第5軍(クラーク中将)もイタリア本土のサレルノ湾に上陸し、イタリア半島に頑張るドイツ軍の一掃を計った。だが、ケッセルリンク空軍元帥指揮下のドイツ軍は善戦し、イタリア戦線では一進一退の攻防が続いた。

一方、南方からはモントゴメリー大将のイギリス第8軍が、ローマを目指して北上してきた。この情勢を見たドイツ軍は、イタ

リア半島を横断するような形で流れるガリリアーノ川とサングロ川に沿って、天然の山々を要害として利用した巨大な防衛線を敷き、この防衛線を「グスタフ・ライン」と呼んだ。米第5軍と英第10軍団の攻める、このグスタフ・ラインは、ラピド(編注:ガリリアーノ川の上流に当たる)川を前面にしてローマへ向かう国道6号線が麓を走るカッシノ山と、周囲の無数の岩山群を背後に控えた要害地であった。

年は変わり1944年1月、要地カッシノに対する第一次総攻撃が行われた。主攻兵力は米第36歩兵師団(米第5軍第2軍団)であった。だが、この戦いではドイツ側の第14装甲軍団指揮下のパーデ戦闘団に阻まれ、米軍最悪の損害を出したのだった。この時、苦境に陥った米第36歩兵師団を救



出したのは、有名なハワイの日系二世第442部隊であった。

連合軍は頑強に抵抗するドイツ軍防衛ラインを突破するため、グスタフ・ラインの後ろ側、すなわちアンツィオにルーカス少将指揮の米第6軍団を上陸させ、ローマとカッシノの連絡を断って、守備するドイツ軍を寸断しようと計った。しかし、上陸した米軍は空軍の野戦精鋭部隊「ヘルマン・ゲーリング」装甲師団の迎撃を受けて、上陸地点に釘づけとなり、カッシノを陥落させる最初の目的を達することは出来なかった。この状態は1944年5月までも続いたのである。

☆モンテ・カッシノの戦い

結局この後、モンテ・カッシノは第2次、第3次そして第4次と、計4回もの連合軍の総攻撃を受けることとなるのである。

攻撃軍は第15軍集団（アレキサンダー大将）で、左翼はクラーク中将の米第5軍の米第2軍団およびフランス外征軍団だった。中央戦線は英第13軍団で、右翼はポーランド第2軍団と英第10軍団であったが、最後の第4次総攻撃時にモンテ・カッシノを直接攻めたのはポーランド軍団であった。

対するドイツ軍はC軍集団（ケッセルリンク空軍元帥）の指揮下に、第10軍、第14装甲軍団があ

り、さらに第51山岳猟兵軍団がこの付近の防衛戦を行った。また、モンテ・カッシノはドイツ第1降下師団が守備し、最も激しい山岳防衛戦を行った。

当時イタリアにはドイツの2個降下猟兵師団が展開しており、ローマ附近は第1降下猟兵軍団・第4降下猟兵師団が配備された。「グスタフ・ライン」ではカッシノを中心に、第1降下猟兵師団が防衛線を敷いた。また、前述の「ヘルマン・ゲーリング」装甲師団はアンツィオの米軍上陸を阻止するために投入されたのだった。

カッシノ山の頂上には歴史に名高いベネディクト派の巨大な修道院があり、麓にはカッシノの町と

ローマへ向かう国道6号線がある戦略上の要地である。だが、2月の第2次カッシノ攻撃では、ニュージールランド師団と山岳戦に慣れたインド師団とが攻撃を行い、連合軍機が1日1,000tもの爆弾を投下する大爆撃ですでに瓦礫の廃墟と化していた。

守るドイツの第1降下猟兵師団の第3降下猟兵連隊の将兵が、ニュージールランドおよびインド師団と戦った。しかし、これほどの大爆撃と猛砲撃にもかかわらず、ドイツ降下兵を全滅させることはできず、その上この第2次

カッシノ攻撃は失敗してしまうのである。

攻める連合軍の7個師団の兵力に対して、ドイツが1個師団程度の兵力だけで戦うことが出来たのは、天然の要害に阻まれ大兵力の投入が出来ず、また戦車などの戦闘車両が十分活用できなかったためである。

さて、第3次攻撃は3月15日に行われた。まず航空機から1,500t以上の爆弾が投下され、砲兵1,000門による猛砲撃が開始された。だが、カッシノの町の半分をやつと占領出来たものの、いまだ完全占領には至ってい

なかった。

この第3次攻撃は7日間続くが、英第8軍の損害も4,000名近くなり、またもや攻撃は中止されてしまうのである。守るドイツ第3降下猟兵連隊の損害もまた大きく、第2大隊は300名が爆撃と戦闘により戦死している。

一方、資める勇敢なグルカ兵と、インド兵は合わせて3,000名の損害を出していた。その後約2ヶ月、連合軍は強襲作戦をやめて、ドイツ軍への補給を断つ作戦に切りかえるとともに、第4次カッシノ攻撃の準備を行ったのである。



☆最後の決戦

そして5月11日、第4次カッシノ攻撃が始まった。ドイツ第4降下猟兵連隊はカッシノの町の防衛と山頂の廃墟となった僧院の防衛。残存第3降下猟兵連隊はその他の高地や附近の防衛。および第100山岳猟兵連隊も加わった。なお、第1降下猟兵連隊は予備部隊となっていた。

米第5軍と英第8軍のグスタフ・ラインへの協同攻撃が開始された。モンテ・カッシノへはポーランド軍団の2個師団が向かった。小さな橋頭堡の争奪戦、瓦礫の中の市街戦が6日間続いた。5月16

日、ドイツ打倒に燃える勇敢なポーランド軍が修道院を攻撃し、これを占拠したのが実質上のモンテ・カッシノの陥落である。翌日、英第4師団もカッシノを完全占領した。

この日ケッセルリンク元帥は、第1降下猟兵師団の残存将兵に、勇戦敢闘を称える言葉と撤退命令を無線で送った。連合軍は血の代償によって、ついにローマへの道を確保したのである。

連合軍の砲撃を受けるカッシノ峡谷と、廃墟となった町並みが見える。岩山であったためか、猛烈な砲・爆撃の割りにはドイツ降下猟兵連隊の戦死者は少なかった。





(左上) 砲撃用観測所として使われたとして、カッシノ山頂の修道院を爆撃する米軍のB-17爆撃機。下方の爆煙の中にカッシノ山と修道院が見える。

(右上) モンテ・カッシノで最も激しい戦いをを行った、ドイツ第1降下猟兵師団の将兵たち。軽武装だったが、1個師団で連合軍7個師団を相手として善戦した。

(下) モンテ・カッシノの麓の町附近で連合軍の攻撃に備える、ドイツ軍第14装甲軍団傘下の75mm砲搭載のIII号突撃砲G型。



第1次モンテ・カッシノ
攻撃時、準備砲撃を行
う米軍8インチ榴弾砲。
砲撃直後で砲口から煙
りが出ている。



ローマへ向かう国道6
号線と砲爆撃で廃墟と
化したカッシノ峡谷。
連絡、偵察用の米軍
ジープにドイツ軍が砲
撃した白煙が左方に見
える。



モンテ・カッシノを防衛
するドイツ軍の装甲戦
闘車両は、初期の段階
で連合軍の爆撃によっ
て全て破壊されてしま
った。





(上・左) モンテ・カッシノの村で市街戦を行うニュージーランド軍兵士。良く隠蔽されたドイツ軍の火点の一つずつ潰してゆく。



(上・中) カッシノ附近の山岳地帯で戦闘を行う、米第5軍の戦闘員たち。開けた北西ヨーロッパの戦場と異なり、険しい中央イタリアの山岳地帯の様子が良く分かる。

(下) モンテ・カッシノで最後の連合軍の攻撃(第4次総攻撃)に備える、ドイツ第3降下猟兵連隊の兵士たち。MG42 機関銃などの装備も見える。





(上・右) モンテ・カッシノ陥落。ニュージーランド軍兵士と M4 シャーマン戦車が、ドイツ軍最後の拠点を掃討して行く。

(下) 1944 年 5 月 17 日、撤退出来なかったドイツ軍部隊は連合軍に降伏した。前進する M4 戦車と後方に送られるドイツ軍捕虜、そして周囲の廃墟が印象的である。

